

夏子の地球の歩き方

第1章 イラン・タジキスタン編

ホームステイ受け入れを通して揺らいだ偏見

今から思うと笑ってしまうけど、私がまだ中学生のころは外国といえば、アメリカであった。外国語といえば英語であった。

私は根っからの恥ずかしがり屋のくせに、近所の英会話教室に通ったことがきっかけで、外国人の先生には積極的に話しかける中学生だった。英語にはなにか堅苦しくないものを感じていたようだ。高校生の時も相変わらず、英語は歴史とともに大好きな教科の一つで、ずっと勉強という感覚がなかった。

まったく国際的な家ではなかったのだが、両親の興味と私の英語好きから高校生から大学生にかけて自宅にさまざまな国の人を短期のホームステイで受け入れた。タイ、韓国、イラン、ドイツ、スペイン。特にイラン人のホームステイの時は家中が緊張した。彼が肉が食べれないと聞いていたからである（今思えばベジタリアンだったわけではなく、ハラール肉しか食べれないという意味だったのだろう）。しかし、私はその中東という全くの未知の世界に対する好奇心から、イランの方に無数の質問を浴びせたのだった。「何時に寝て何時に起きるの?」「イランは危ないの?」「何を食べているの?」知る限りの英語であらゆること質問したことを覚えている。そして彼はいつも丁寧に笑顔で答えてくれた。私の中でのイランのイメージ、過激なイスラム教、上野でたむろするイラン人労働者、イラン・イラク戦争、怖い顔の人たちと型にはまったイメージが揺らいだ瞬間だった。

ペルシャ語学科へ入学・イラン留学

そして、いつのまにか大学ではペルシャ語専攻に入学することになった。実際大学ではペルシャ語よりも社会学や文化人類学に興味をもった。しかし、曲がりなりにもペルシャ語専攻ということで、大学2年の夏にイラン旅行に行ってみたところ、今迄にないカルチャーショックとともに、表向きの暗く厳格なイスラームのイランの顔とイランに生きる普通の人々の明るい素顔とのギャップにすっかり魅了されてしまった。そして、次の年にはテヘラン大学付属語学学校にイラン留学を決めたのであった。

イラン留学中は今迄住んだ国で一番現地にどっぷり浸かったと思う。特に現地の文化や社会を学んだのは教室ではなく、タクシーの中だった。イランではタクシーが安くて非常に便利な交通手段だった。また、一般の車も常に小遣い稼ぎにタクシー業をしており、タクシーの運転手をしている人は非常に平均的なイラン人であった。また、無言で運転するなんてことはあり得ず、常にお互いに話をしていった。そこで、ペルシャ語も上達するし、当時の政権に対する率直な不満、家族の構成にイラン社会の問題など全てがざっくばらんに話された。

代わりに私も日本について何度も聞かれ何度も答えた。面倒くさいと思う事もあったが、会話の練習にもなるし、日本について改めて考える良い機会になった。特にイランでは宗教を聞かれることが多く、とりあえず仏教などと話すと、仏教についての興味や見識を披露され、こちらもタジタジになってしまう。そこで、改めて日本の仏教や神道について考える機会にもなった。また親しくなった人は必ず、家に招待してくれる文化で、私もどれだけ家にご招待に預かったか分からないくらいである。外ではスカーフにマントを着て保守的に見える人も、自宅ではおしゃれな髪型とファッションを楽しんでいること、娯楽もあまりない中で、登山をして自然を満喫したり、友人を頻繁に家に招いてパーティをして、本当に人生を上手に楽しんでいる姿を見ると、日本ではお金を使った娯楽に溢れている

など思ったりした。この経験で将来私も人を招待できるような温かくオープンな家庭を作りたいと思うようになった。

すっかりイランの心地よさに慣れた私であるが、帰国後の就職活動では役に立ったとは言いがたい。しかし、これだけお世話になったからには、何かの形でイランまたは同じペルシャ語が使われているアフガニスタンに貢献できればという気持ちは持ち続け、帰国後はアフガニスタン研修員の通訳や、映画祭のアテンドボランティア、日本にいるイラン人難民の支援などの活動をした。就職するか大学院に行くかで迷ったが、社会に出てみたいとの思いから旅行会社に就職し、会社で働きながらもボランティア活動などで、引き続きイランに関わりつづけた。



写真1：テヘラン留学中色々な国のクラスメートと（中央が著者）

中央アジアの小国タジキスタン共和国へ

チャンスは突然やってきた。ある日以前通訳のアルバイトをしていたところから在タジキスタン共和国日本国大使館でODAの仕事のポストの話をいただいた。その時、私の心はすでに、タジキスタンというまだ見ぬペルシャ語圏へ向いていた。あの人なつこいイランと同じ言葉を話す中央アジアの国はどんな冒険が待っているのであろう。ODAには当初懐疑的であったが、現地にとけ込みうまく調整することで少しは有効なものにすることができるのではないかとの思いで、タジキスタンの日本大使館で働くことを決意した。

タジキスタンへの赴任は予想以上に大掛かりなものだった。まず、狂犬病、A型B型肝炎、腸チフス、肝炎等の沢山の感染症予防注射をしなくてはならないし、直行便もないので、非常に大回りして行かなくてはならなかった。水や電気も安定してないと知り、そこで初めてイランはどんなにインフラが整っている国であったのかと思い知った。実際イランはタジキスタンにとっては大国で産業国でもあった。実際に飛行機で降り立つと本当にバスターミナルのような小さな空港で、到着してみても分かったのはタジキスタンがペルシャ語よりもロシア語の世界であったことだ。中央アジアは昔からさまざまな民族が交じり合っており、タジク人だけでなく、ウズベク系、ロシア系も多くいる。加えて長いソ連時代を経ているため、現在のタジキスタンの公式な言語はタジク語ではあるが、実際にはロシア語が共通語として通っているのである。だから、外国人を見るとまずロシア語で話かけるのである。

すっかりペルシャ語を話すつもりで来た私はまずこれに戸惑ってしまった。また、野犬の多さにも驚いた、特に夜には群れをなした野犬がウロウロしていた。公共のゴミ箱周辺にはゴミを漁る人もいて、タジキスタンの貧しさを浮き彫りにしていた。

日本大使館での勤務

日本大使館では草の根・人間の安全保障無償資金協力の担当として、タジク人スタッフ2人日本人スタッフ2人のチームで仕事をした。共通語は英語。業務内容はまずタジキスタン全土のNGOや地方の村長、郡長などから実施したいプロジェクトの申請書が日本大使館に提出されるのでそれを把握。提出されたプロジェクトを日本政府が国際社会へ向けて押し進める「人間の安全保障」の視点から支援の可能性を探るため、申請者との面接やフィールドでの聞き取りやデータ収集を通して現状把握を行い、その調査の結果から日本大使館として改めて内部で検討し、最終的に東京の外務省本省に日本語で申請書を書いて申請するという手順である。

内戦終結からまだ10年しか経っていないタジキスタンでは、基本的なインフラも未だに整っていないところが多かった。周辺国に比べると特出した産業はなく、経済発展は目だって遅れをとっている。そのため、政府の財政も非常に逼迫しており、外国への援助が国民の頼りという面もあったため、毎日数件の申請書が届き、中身を把握するだけでもなかなかの作業であった。

もちろん日本大使館は役所であるから、申請書の翻訳（タジク語やロシア語→英語→日本語）や、出張・調査報告、外務省への稟請（外務省の公式な形での申請）など多くの書類を独特の語法で書かなくてはならぬ苦勞もあったが、一方で現地の人と直に話せ、実際に車が入れないためロバで4時間くらいいった山奥の地まで行くこともあり、とても刺激的であった。また、地方へ行くほど、家庭に近いほどタジク語を使う人が多かったのも私にとっては嬉しいことだった。



写真2：プロジェクト現場を見に初めてヘリコプターに乗る経験もした。（サレズ湖）

農業分野への挑戦

大使館では農業の発展が、自給自足や栄養改善、しいては国の発展につながるという考えのもと、農業振興をサポートするプロジェクトを優先順位にあげていた。農業という私にはまったく専門外のことに、私は戸惑ったが、同僚が幸い農業を専攻していたので、同僚から多くのことを学んだ。よって、現地調査ではその土地の特産、収穫量、灌漑設備の有り無し、灌漑の方法などが質問の内容に多く含まれることとなった。

ある地方の郡長からは、毎年夏に山から水が溶け出し、農地が水害で開拓できないので、堰を作らた

いという申請がきて、ある地方の農業共同体は灌漑用水路が現在土製で水のロスが多いので、コンクリート化したいという。あるコミュニティは水道がなく、一日5回ほど子どもが遠くの給水所に水汲みに行かなくてはならないので、村の中に給水所を作りたいなど。大半は山に囲まれたタジキスタンでは水が豊富であるが、それはうまく管理ができないと害にもなるのだということを知らされた。そして、水の重要さを日常的にも思い知った。首都ドシャンベですら、断水や水道水に泥や枯葉が混じっていることが多かったのである。私は新しい事だらけで無我夢中で週末も仕事のことを考えながら過ごした。しかし、専門家ではないので、限界もあり、実施団体が本当に最後までしっかりやれるか、手抜きはないか、持続するかなどはいつも不安が残った。

日本を含め様々な外国の支援で実施されたプロジェクトでも、何か高価なものを提供して一回限り、または設備等のメンテナンスに費用がかかって、故障したまままた外国の援助を申請するといった失敗例は山ほどあった。何よりも、持続性が大事だということを知った。そのため、設備関連のプロジェクトでは誰がどのように管理して行くか、修繕費用はどうするのかなどに特に注意を払った。様々な団体が、水利組合や農業組合を作る活動をしていて、そのようなソフト（人材育成など）な活動に、ハード（物質的）な支援をすることは効率が良いと思われた。「持続的=sustainability」というキーワードが私の中で大きな存在になり、それはすでにいわゆる国際開発分野でもキーワードとなっていたことに気づいた。



写真3：プロジェクト現場で現地の代表、技師のみなさんと（右から2番目が著者）

新しい旅の予感

また、最終的に外国の支援に頼らないようにするには、ビジネスや営利の活動をより活発にする必要があるのではないか、いつまでも外国の支援に頼っていると、援助慣れしてしまい本来の活力を生かせないのではという考えも浮かんだ。しかし、ODAではビジネスに関わることは支援の対象にならなかったため、学校や病院、地方政府（村や郡）が政府予算の少なさを訴えてくるということがこれからも延々と続くような気がしたのである。そのようなもやもやした思いをもちつつ、2年間はあっという間に過ぎ、帰任となってしまった。しかし、ここで見た実際の人々の生活、国際機関の活動、国際・ローカルNGOの活動などすべてがとても大きな印象を私に与え、もっと知りたい、もっと改めて学びたいという気持ちが高まった。それが、次の私の旅の理由となったのである。

（つづく）